別記様式第７号（第１３条、第２７条関係）

平成２３年１月２４日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　財部 めぐみ

学位論文題目

奄美大島における仏教の成立と展開

(The Establishment and Development of Buddhism in Amami-Oshima)

論文審査の概要

１．論文の狙いと概要

本論文の目的は、第一に、明治期以降の奄美大島における浄土真宗本願寺派の布教・定着過程を奄美社会の歴史的変遷の中に位置付けて体系的に記述すること、第二に、その歴史的状況を踏まえて、奄美仏教の特徴あるいは特殊性について分析・考察することにある。従来の奄美の仏教研究が、地域的にも時代的にも断片的かつ仏教の土着化の問題に傾斜する傾向が強いのに対し、本研究は、西本願寺の布教・定着過程を詳述し、先行研究により示されたいくつかの論点を実証的な観点から再考するとともに、新たに、独自の視点を提示し、奄美仏教の特徴を教団と島民の両方の視点から明らかにすることにある。

２．論文の構成

本論文は、奄美大島における仏教の定着過程を記述した１～3 章と、奄美仏教の特徴を分析した 4～5 章の大きく２つに分かれる。第１章は、1609 年の薩摩藩政期以前と以後について論じ、藩政期以前の奄美大島はいかなる外来宗教も到来していない民俗信仰の時代であり、また、藩政期以降から明治初年の廃仏毀釈までは、薩摩藩主島津家の菩提寺の末寺である曹洞宗観音寺が創寺されたが、島勤めの武士のための祈願所であり、奄美の島民は引き続き仏教とは無縁であったことを確認する。第２章では「近代奄美大島における西本願寺の布教過程」と題して、明治 11 年に浄土真宗系の仏教が初めて奄美大島に渡来して以降、当初の説教所時代から大正５年の大正寺の誕生までの布教・定着過程について詳

述する。第3章は、大正期以降の大正寺のその後の展開を戦前と戦後に分けて、戦前は、奄美善隣館を通して寺院が行なった慈善活動が、従来の檀家制度とは異なる新しい布教スタイルとして当時の島民の社会的ニーズに合致したことが、島民の仏教受容の最大の要因であったことを明らかにする。戦後は、アメリカ軍政期の8年間に、カトリックが隆盛を極める一方で、大正寺は幾多の困難に直面したが、歴代の住職たちが、この大きな時代の変動期に、奄美社会とその都度、新しい関係を取り結んでいったことが、苦境の打開につながったことを指摘する。

奄美仏教の特徴を論じた4章と5章では、まず4章「奄美開教の展開」において、奄美開教使による布教活動を詳述し、開教使と当時の時代状況との関係性を類型化する。「奄美仏教の特徴と現在」と題した第5章は、4章で示した開教使の類型をもとに、内外の開教地における布教が「開教」と呼ばれつつも、その内実は仏教徒に対する「追教」や「復教」という性格のものであったのに対し、奄美開教は、非仏教徒である島民に対する文字通りの「開教」であるとして、奄美大島における仏教布教の「開教性」を奄美仏教の新たな特徴として指摘する。さらに、従来の宗教研究に特徴的な仏教の土着化という視点に対する新たな視点として、仏教が逆に奄美の民俗信仰や習俗に与えた影響について論じる。

結論として、奄美の仏教の特徴を、教団の視点からは「開教性」と「慈善活動」を指摘する。また、島民の視点からは、薩政期における民俗信仰や観音寺の総檀家として半強制的に宗教が決められていた時代から、明治初期の本願寺派の仏教の到来によって、島民が初めて個人の意思で諸宗教を選択する時代へ移行するという、宗教の選択可能性の素地を作ったのが西本願寺派の布教展開だったことを明らかにした。

3．本論文の評価すべき点

第一に、奄美仏教史の体系的記述の試み。奄美大島における仏教研究は、先行研究自体、極めて少なく、奄美の仏教の体系的研究という意味では本研究が初めての試みであること、第二に、先行研究を詳細に分析し、従来の仏教研究が奄美仏教の特徴として明らかにした「檀家制度の欠如」と奄美独特の布教方法としての「慈善活動」のほかに、新たに奄美大島における仏教布教の「開教性」をその特徴として指摘したこと、第三に、奄美善隣館の活動は、伝統仏教が近代社会で、檀家寺としてのサービス以外に何を実践していたかを知る上で貴重な事例であり、こうした視点での研究に先鞭をつけたといえることなどが、評価できる。

4．問題点

第一に、外来宗教の受容主体である奄美の島民の姿が具体的に描かれていない。また、

島外との往来も活発であったことから、動態的な社会変化の中で仏教の定着・受容を考える必要がある。第二に、奄美仏教の特徴として挙げている「慈善活動」に関しては、①慈善活動が展開された奄美社会の実態をもっと詳しく描く必要があること、②慈善活動といっても実際には女子教育がメインであり、「社会参加」とも「慈善活動」とも違うので、「慈善活動」に代わるより適切な用語を考える必要がある。③戦前において成功した寺院の「慈善活動」が、戦後において維持できなかった要因についても、国家主義との関係も含めて検討する必要がある。第三に、戦後における婦人会活動の中の大正寺という位置づけが足りない。第四に、仏教が奄美の習俗など慣習的な部分に与えた影響だけではなく、奄美の人々のエートスに与えた影響についても論じる必要がある。

5．総合評価

以上、諸々の課題は残るが、従来の仏教研究には見られなかった独自の視点と斬新な事例の提示によって、仏教研究に新たな道筋を示すことができた点は評価できる。

よって、博士論文の基準を満たしていると判断する。

授与する博士学位　　学術

論文審査結果　　㊀・否

審査委員

主査　（氏名）桑原季雄　　副査　（氏名）平井一臣

副査　（氏名）伊藤宏明　　副査　（氏名）島薗進

副査　（氏名）西村明